幻想郷侵入記

モンテス級

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幻想郷侵入記

【Ｎコード】
Ｎ８６９５Ｔ

【作者名】
モンテス級

【あらすじ】
之は終端の神と異世界の少女達の壮大な戦いの序曲である。

※ほのぼのです。

この話しのコンセプトは、幻想入りを拒まれる最強系主人公です。
最強だからこそ、幻想入りが出来ない。こう言う話しが有ってもいいじゃないかな？

第一回目　少年と少女（前書き）

突発的衝動に駆られてやった。

後悔もしてないし反省もしてない。

公開はしたが……

第一回目　少年と少女

とある森の中少年はこの場所に来れた事にほくそ笑んだ。

だが、その笑みはすぐに眩い金糸の髪を持つ美女に凍りつかせられる事になる。

「……貴方、またここに来たの？」

ピキピキと青筋を立てて十代半ばの少年を睨む妖艶な美女。

美女は空間の裂け目から出て少年に近づくと少年は聞き覚えのある声のする方向に恐る恐る後ろを振り返った。

「や、やぁ……久しぶり」

「久しぶりって一週間程度じゃない。……確かにここ――幻想郷は全てを受け入れるわ。だけど貴方は駄目」

「……駄目って酷い」

しょぼーんと落ち込み泣きながら美女を見上げる。

「あーもう、泣かないでちょうだい。それでも貴方神様なの？」

「うっだって紫が……」

「何回でも言うけど貴方は完全に幻想入りしてはいけないの」

「えっ、でも僕忘れ去られているよ？……多分」

「何時っ？！　誰がっ？！　忘れたって？！」

突然、美女――八雲紫の怒声に少年は縮こまるが少年はめげずに紫に言い返す。

「皆が僕を……」

「……はぁ～薫。貴方、種族は何？」

紫は深いため息を吐きながら少年――薫に既に分かっている事を問う。

「こんな成りだけど……神やってます」

薫は自身で分かっている通り神としての威厳が全くない格好である事は理解しながら答えた。

「……で司るモノは？」

「祝呪（しゅくじゅ）……ほさきを司ってます」

「あら……ちゃんと分かってるじゃない。褒めてあげるわ。じゃ、改めて聞くけど……」

言葉を切ると同時に、呆れた声で問いかけた。

「人々は祝（ほさ）／呪くのを忘れた？」

紫と薫の間に重い沈黙の空気が流れる。

「……忘れたとお」

「ほう？　明らかに間違った答えを言おうとしているのはこの口かしら？」

思うと続けられた言葉を紫はみなまで言わせずに薫の頬を抓った。

「いふぁい、いふぁいよ。紫～」

「はぁ～。貴方、本当に何回言っても学習しないわね。いい？　表で生きられなくなった幻想。つまり忘れ去られたモノが行き着く場所が幻想郷なのよ。貴方忘れ去られる所か、思いっきり人々の習慣を司ってるじゃない！」

「え～でも、みんな僕の名前知らないよ？」

「貴方、薫って名前も定めた名前じゃないわよね？　そもそも、貴

方自身に名前があるの？」

「薫！」

自信満々に薫は紫に胸張りながら自身の名を叫ぶ。が、

「神としての名は？」

紫はばっさりと薫の言葉切った。

「むぅ」

「答えなさい薫」

紫から膨大な妖気が溢れだし、周りの木々が、妖怪が、動物が、膨大な妖気に脅え紫の辺り一帯から逃げ出す。

「無いです」

しかし、紫の威圧を受けても涼しい顔して、面白くなさそうに「ちぇ～つまんないの」薫は口を窄ませた。

そんな薫が少し笑えたのか紫は薫の右頬に手を当て、優しく撫でた。

「そう、貴方自身の名は知られてなくても貴方が司っているモノが忘れ去られてないのよ。幻想郷は幻想が最後に行き着く場所」

続けて紫は言う。

「……そうだから、貴方はここに住む事はないでしょうね」

一瞬だけ薫が見えた紫の表情は酷く寂しく、届きそうで届かない手に入らない者を見つめていた。

薫と紫が出会ってもうすでに二千年以上になる。

薫が初めて紫のその表情を見たのだ。薫はこれ以上は何も言えず何も見ず、この場――幻想郷を去った。

紫はただ薫の去っていく背を見えなくなるまで見送り立っていた。

1

――そして時は過ぎ

「……貴方何でまた？」

「いや～、近頃は道が複雑でして」

「そう、毎回同じ場所で迷うのね」

ジト目で薫を見つめる紫。

「というより、貴方幻想郷に住むの諦めるんじゃなかったの？」

「え？　誰がそんな事言ったの？」

物凄く心外な顔して薫は紫に言う。

「いや、だってあの雰囲気で別れたら……」

そう、あの後紫は少しセンチメンタルになりながら薫がいつも来る場所に感慨に耽る為に来たのだが、紫の目に入ってきたのはいつも通り薫が侵入している様子。

こればかりは、流石の紫も顔を羞恥と怒りで真っ赤にして薫に攻撃を加えた。

それからと言うモノ薫は性懲りもなく幻想郷に侵入しにくるのである。

「別れたら……？」

「たら……」

「……たら？」

薫にとってあの雰囲気の別れはその日侵入するのを諦めるのであって決して幻想入りを諦めたわけではない。

「あ～もうっ！！　そんな事はいいからさっさと出て行きなさい！！」

自分だけが過去二千年以上の付き合いを想ってあの場所に赴いたと知り恥ずかしくなり、能力を行使して薫を視界から外した。

すると上下左右に薫の足元にスキマが開き、薫は中に落ちて行く。

「次はどう侵入するべきか……」

紫のスキマに落ちながらも薫は懲りずに幻想郷に侵入する手立てを考えるのだった。

これは、神様な少年とババアな訂正華麗な少女の攻防日々を記したものである。

第一回目　少年と少女（後書き）

底辺作者がカッとなって書いた。

続くかはモチベーション次第です。

というかもう一つの作品があるので続かないと思います。

書くとしたら気分転換ぐらいだと思うけども……。

第二回目　懲りない神様（前書き）

まさか、続いちゃった第二弾。

しかし、所詮は気分転換です。

出来れば感想欲しいです。

第二回目　懲りない神様

今日も今日とてホサキの神様は幻想郷に住みたいが為に侵入する。外の世界はもう居辛いのだ。

とは言っても概念的に、信仰的な理由で居辛いわけではなく、むしろ数多の幻想達の生活と比べても寧ろ裕福と言っていいのだ。

何しろ、祝（ほさ）／呪きを司ってるのだ。今でこそ、薫自身に信仰する人はいないが祝う、呪うのは薫の領分である。人々が祝い、呪いを忘れない限り薫は幻想郷の外で神として在り続けられる。

一人一人の信仰が薫へと向かう訳ではないが、人々は薫の領分であるホサキを繰り返し繰り返し世代が代わってもホサキ続ける。

神様として知られてはいない、しかし名の無い神として、社を持たない神として、確かに薫は現代（いま）に至るまで神で在り続けていた。

その神様は、夏はガンガンにクーラーを効かせ扇風機を多用し、冬は炬燵にストーブーを多用して暮らしていた。

贅沢の極みである。神、自らが地球温暖化を悪化させているのは人間からしてみれば顔を顰めるしかないが当の本人はどこ吹く風。

その駄目駄目な人間……神生活を捨ててまで薫が幻想卿に侵入するのは寂しいからである。

何せ、他の神様や妖怪達は大部分が幻想郷に住んでおり外に残るは後僅かと言わんばかり……。

要は幻想郷で友達と遊びたい。それが薫の目的である。

だが、今日も今日とて幻想郷の賢者がそれを阻止した。

「かーおーるー？」

「ひいっ！？　見つかった？！」

今日も妖怪の賢者――八雲紫にあっさり見つかり呆気なく現実世界へと送還された。

スキマ妖怪――八雲紫。

彼女の能力は《境界を操る程度の能力》である。

薫の侵入さえ察知できればいとも簡単に送還できる、便利な能力。

神に匹敵する力を持つ彼女だが最近はその能力を薫の送還するのが殆ど。

「もう、薫の所為で睡眠時間が四時間減って毎日八時間じゃないっ！　肌が荒れちゃうわ」

彼女を苦手とする店を営んでいる半妖が聞けば、苦笑しか見れないセリフが紫の口から零れる。

スキマを開きそこに身体を沈ませ紫は自らの住みかへ帰って行った。

1

現実世界、とある安いアパートの一画。そこで幻想郷から追い出された薫が戻っていた。

「むむ、今日も捕まっちゃったか……紫の能力反則だよなー《境界を操る》し、流石紫汚い。紫汚い」

腕を組んで汚い汚いと頷く薫。

「何で何時も見つかるんだろう？　……考えるの疲れるし、まぁいっか今度考えよう」

あっさり考える事を放棄し、台所に向かいアイスの箱を取りアイスを食べ始めた。

「うまうまー」

アイスを食べながら、芋虫の如くモソモソと動き扇風機とエアコンの電源を入れる。

クーラー全開。扇風機全開。薫は安心して床に仰向けに寝転びへタレた。

部屋の温度、摂氏十六度。

外気温、摂氏三十二度である。だらけの神ここに極めり。

稀に見ない駄目人間、元い駄目神（ダメガミ）である。

――ピピッ！

突如、薫のポケットから成りだす電子音。

「んー？」

仰向けに寝そべったままの状態でアイスを意地でも口から離さず空いた両手でポケットを弄る。

右手に取りだしたのは特に特徴と言った特徴のない無骨なデザインの携帯。

ぱかっと開き。見ると予定通知がされていた。

――午後五時より夜十時までバイト

「んっそうだった今日バイトだったじゃん、支度しないと……」

口の中に入っているアイスを飲みこみ支度の準備をし始めた。

斎藤薫（仮）　職業、フリーター兼最古参神様である。

バイト場所、個人経営のファミレスに着くと薫は真っ直ぐ控室に入り挨拶。

「どうも、こんちわ～」

「おう、御苦労さん。今日はいつもより客多いぞ？」

厳ついガタイの良い中年の親父が薫に挨拶を返し、薫のフロアの制服を投げ渡した。

「えー」

嫌そうに顔を歪め服を受取りそのまま更衣室に入らず、そのまま着替えた。

男同士だから気にしないのか、厳つい親父――料理長は薫の言葉に突っ込む。

「なんでや！　喜ばんかい！」

「少ない方が楽だから！」

「アホかっ！」

スパーン！　冴え渡るハリセンの音が部屋に響いた。

「禿げるよっ！」

「明らかに見た目が俺より年下のお前が禿げるかっ！！」

料理長――蓮城環２８才見た目四十前半。独身、彼女ナシ。斎藤薫３０才（仮）見た目十代半ばより年下である。

馬鹿な掛け合いしていると控室の時計が午後五時を知らせた。

「うっし、じゃやるか薫」

「うぃー」

「ったく、仕方ねぇな。今日の帰りは俺から従食だしてやるから頑張ってくれ」

「了解しましたっ！」

ビシッと環に敬礼。神様によるウェイターのバイトが始まる。

「あのーすみません。オーダーいいですか？」

鮮やかな緑色の女子高校生が薫を呼ぶ。

「はいはーい、今行きますよ～」

今日も世界は平和です。

第二回目　懲りない神様（後書き）

補足。

従食、従業員食の事。略して従食。メニューよりは割安だが有料である。

第三回目　嫁を娶る神様（前書き）

もう一つ、小説のシリアス感が半端なく。
酷く病んでいるので息抜きに書きました。

第三回目　嫁を娶る神様

――とおりゃんせ、とおりゃんせ
ここはどこの細道じゃ
天神様の細道じゃ
ちっと通してくだしゃんせ
御用のないもの通しゃせぬ
この子の七つのお祝いにお札を納めに参ります
いきはよいよい　帰りはこわい
こわいながらも
とおりゃんせ　とおりゃんせ

バイトが終わり、薫は一直線に家に帰って眠った。

朝日が昇る頃、薫は起き出し今日も幻想郷へ侵入の準備をする。

「うーん、今日も実に侵入日和だ」

正直どういう感覚だ。と薫の旧友である紫から突っ込まれるだろうセリフ吐いて背伸びをした。

五分準備体操して、お茶を一杯。

冷蔵庫の中に大量の冷凍食品を弁当に入れる分だけレンジで温め弁当箱に入れた。

自分の準備が整った事を確認すると、

「ふぅー、今日も頑張りますか！」

自身の司る能力を発動させる。

薫は空間を祝（ほさ）／呪く。

すると、ビシッと薫の目の前に空間に亀裂が入り、バキバキッと小枝でも折るような音が部屋に響いた。やがて罅の大きさは薫の等身大程になり薫は拳を以て目の前の亀裂を広げ空間が破壊された。

「さーて今日は何処から入ろうかな～」

薫は空間の裂け目に弁当箱を持って入る。

空間を適当にぶらついていると気になる場所を見つけた。

何だろう？　と思ってその場所を見た。

「……あっ神気だ、仲間じゃん！　どれどれ～？」

今いる空間から出る為に薫は再び薫は能力を使い空間を破壊する。

外に出るとそこは寂れた神社だった。

一応、神として分類される薫は他人――他の神の家に入った事になるが薫が見た所この神社は神らしい神は居ない。

薫は安心して不法侵入した。

「ふーん、幻想郷にも神社あるんだね……おっここの神社居心地がいいな！　ここを拠点にしてもいいかな？　神様居ないし……うん、いいよね！」

勝手にこの神社に住む事を決めると神社のとある方向の神気が濃くなった。

ここに来た理由を思い出し薫はその方向へ向かう。

神社の鳥居の方向へ向かうと一人の少女が神を降ろしてる所を見た。

「まー、こんなものね」

巫女装束を改造したような服を来て神事に励んでいた。

何より目立つのはその腋である。何故巫女装束をきちんと着ないのか薫は突っ込みたいが紫の服装を思い出して納得した。

薫が興味深そうにその少女を見ていると突如少女が唸り、声を上げた。

「っ？！　家に祝福の神様が来ている気がする！　お茶の準備をしなきゃ」

（……どんな直感だよ）

確かに薫は祝福も司っているので強ち間違ってはいないが薫は呪いも司っているのだ。

恐ろしい直感力を持った少女に戦慄しながらも薫は神社賽銭箱の近くに座る。

しばらくして、お茶とお茶菓子を持った少女が来て、薫を見て吃驚。

「あら、思ってたよりも……ところであなたが神様なの？」

「分類ではそうかな？」

「ふーん、お茶二人分用為しておいて良かったわ、はいこれ」

少女は薫に湯飲みを渡し、薫が飲んだ事を確認して自分もお茶を啜った。

はふぅー、落ち着いた空気が流れる。

「……ねぇ」

薫が少女に声をかける

「何？」

「今日からここに住むか」

「駄目よ」

「いくらでもいいわ！」

にゅっと空間から上半身出している女性が薫の隣に突如現れた。

「ゆっ紫！　何故？！　ばれないと思ったのに……っ」

「あら、貴方紫と知り合いなの？」

「えぇ、二千年以上の付き合いになりますもの……ねぇ？　何回も言ったでしょう？　―ここに（幻想郷）住まないで頂戴」

薫の足元に隙間が開く。薫はこのまま抵抗しなかったら堕ちるが薫は能力を使い宙にとどまる。

「巫女の人！　ここの神社僕が予約したからね！」

「……待ってるわ」

薫を惜しそうに見送る少女、それを見た薫は少女に祝福を授けた。

「契約成立！　アイルビーバック！」

薫はそう言って隙間に落ちて行った

「来ないでいいわよっ！！！！！！！」

紫は隙間に落ちた薫に向かって感情的返した。

「別にいいじゃない別に彼が幻想入りして来ても」

「良くないわよ。霊夢いいわね？　薫は名が無い神なのこの意味貴方なら分かるでしょう？」

紫は色々と説明するが少女は特に気にしてない様子。

「別に薫さんがここの神社に住んでもいいでしょう？　仮にも神様なわけだし」

「薫！！！！！！！！！！！！！！」

紫の声が神社の境内に響いた。

第三回目　嫁を娶る神様（後書き）

知名度が低い神様とそれを許容する素敵で正体不明の巫女。

神様と巫女の関係が良く分からない二人アホらしいですね。

巫女は神の嫁と紫は知ってるだけに悩ませる事態です。

フラグは立ってません。

周りが考えないと結構大変ですね～

御意見批判感想をお待ちしております。

第四回目　幻想入り（前書き）

お気に入り登録してくれた皆さま申し訳ありません。

クオリティは相変わらずですが……どうぞ

第四回目　幻想入り

目の前にある空間をホサキ、歪みを生じさせる。

次第に力を強めて行くと歪みは大きくなり、空間が割れた。

「よし、おーけー。今度こそさらば愛しき現世よ！」

駄目神こと斎藤薫は今度こそと念を入れ空間に入りそのまま部屋に放りだされた。

「えっえええええええ！！！！！！　入る前から感知されたっ？！」

「ふっ甘いわね薫。全然なってないわ。私がいつまでも結界に侵入を許すと思って？」

薫が開けた空間と重なる様に紫のスキマが展開されその中から紫が上半身を出していた。

「あらあら、今回は手も足も出ないようね？」

紫が勝ち誇った様に薫に言った。妖術や戦闘では今まで一切勝てなかった薫に対する意趣返しである。

「……ぐぎぎぎぎ」

薫の力は強大である。それこそ幻想郷を全てを呪い掛ける事も可能なのだ。

その薫が幻想郷に入れない理由は唯一つ。紫に住民として受け入れられないからだ。

幻想郷の管理者である紫に認めてもらえない事には薫は本当の意味で幻想入りとならない。

だからこそ侵入には紫に気付かれる必要があり、そして紫が見逃すもの存在でないと駄目なのだ。

良くも悪くも薫を紫が一番理解している。薫が何処に隠れようとも紫は感じ取れる。薫の能力で世界を誤魔化しても紫は感で薫を見

つけれる。

「さて、帰ろうかしら」

勝ち誇っている紫を見て薫は精一杯の抵抗をする。無論、至近距離で紫が見逃す筈がない。

こちらを振り向く紫に薫は携帯のカメラのシャッターを切った。

「あらあら、私に惚れたのかしら？　それともでき上がった写真に落書きしようとするなんて幼稚な事をするのかしら？」

扇で口元を隠しオホホホと現状の優越に浸る紫。

「今度こそ、永住してやる！」

「負け惜しみかしら？　まぁ、いいわ、ではごきげんよう」

スキマに入り幻想郷へ帰る。

あっさりと侵入しようとした薫を置いて帰った紫だが、これには訳がある。

二人の間に出来た暗黙のルールがある為だ。

・侵入する側は幻想郷に一日過ごせたら、された側は永住を認め

なければ成らない。

・阻止する側は侵入者を発見出来た場合その日は侵入禁止に出来、追い出せる。

・互いの生死に関わる術は禁止。

・ひと月の間、幻想郷に入る前に侵入阻止した回数が侵入した回数を上回れば、薫は紫の一つ願い事を聞かなければならない。

・ひと月の間、幻想郷に侵入した回数が阻止した回数を上回れば、紫は薫の願い事を永住以外の願いを一つ聞かなければならない。

二人が口裏を合わせたわけではないが、約束事に矛盾が出ずにキチンと履行する辺りは……。

一週間後、薫は数人罪と書かれた袋を被った怪しい漢を連れて自宅の近隣にある森に来ていた。

「諸君、君達に来て貰ったのは他でもない。」

重々しく口を開き、あまりにも重い空気に漢達はゴクリと唾を飲む。

「私の天敵である紫を二十四時間引きつけて欲しいのだ」

薫が漢達に依頼内容を伝えると即座に漢達は返事をする。

「ぜひ、我々にお任せを！」

「紫様を是非魅了してみせましょう！」

「紫様に踏まれる事を考えただけでも！！！　ハァハァ……」

「我々、罪袋にお任せあれ！」

そう彼らは薫の撮影した紫に釣られてやってきた漢達だった。

一週間前の夜、薫はネットにスレを立てた。

【スキマから】八雲紫を打倒したいんだが【ババァン】

１名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：３９：２２　ＩＤ：ｃＶＣｏｍ６ｘＩ０

こいつをどうにかして倒したい

ｔｔｐ：／／ｇｅｎｓｏｕ．ｊｐ／ｙｏｕｋａｉ／ｕｊａｕｊａ／ｕｐｌｏｄｅｒ／１２９３８１２８．ｊｐｇ

２名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：４２：０２　ＩＤ：ａＶＤＰＱｃＮｓ０

＜＜１合成乙

３名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：４４：２９　ＩＤ：ａＶＤ２３Ｈｉｓｎ

待て本当に合成か？これ

４名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：４７：５６　ＩＤ：ＹＪ６ｃｇＧＤＹ０

ゆかりんが居ると聞いて

５名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：５０：４５　ＩＤ：ｃＶＣｏｍ６ｘＩ０

＜＜２

＜＜３

合成じゃない

こいつが引っ越しの邪魔をするから是非何かアイデアが欲しい。

６名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：５２：１２　ＩＤ：ｕ３ＹｏｃＬｊｒＧ

＜＜１

写真の人物と一緒に歩いてた所を思い出しんだが

もしかして、お前ファミレスで働いてないか？　博〇町でさ

勘違いだったらスマン

７名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２１：５３：３３　ＩＤ：ＥＯＲＳｇＫＷｙＭ

特定キタ―（゜∀゜≡゜Д゜）ムハァ―！！

＜＜６

と言う事は写真の美女はモ　ノ　ホ　ン？

８名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：００：４５　ＩＤ：ｃＶＣｏｍ６ｘＩ０

＜＜６
肯定しておく、だけどこれ以上は勘弁
それよりアイデアくれ引っ越しがしたいけど、こいつの所為で
移住が出来ない

真剣に悩んでいるんだ

９名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）
２２：０３：１１　ＩＤ：Ｊｑｋ４ＮＰＹＲ２

リアルゆかりんキタ━（゜∀゜）━！！

と言う事は来るんだろうな？

１０名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）
２２：０３：３０　ＩＤ：ｔＵｍｉｊ７６Ｖ

（　罪）＜呼んだか？

１１名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）
２２：０４：０８　ＩＤ：ＬＱＹＺｑ７ｋＱ８

はえええええｗｗｗ

１２名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）
２２：０５：３４　ＩＤ：５ｙＤｅｏＫｕ８Ｊ

早すぎワロタｗｗｗ

１３名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：０５：３９　ＩＤ：４ＱＶｈｂｆａｂ０

流石、罪袋ｗｗ

１４名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：０５：５４　ＩＤ：４ＱＶｈｂｆａｂ０

というか誰も

＜＜１

の質問に答えてない件についてｗ
このままだと拗ねるぞｗ

１５名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：０６：３４　ＩＤ：ｃＶＣｏｍ６ｘＩ０

＜＜１４
サンクス

このまま、誰も反応しなかったら雲隠れしようしてた

で、どうしたらいいかな？

１６名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：０７：０５　ＩＤ：ｔＵｍｉｊ７６Ｖ

＜＜１４
ナイスフォロー

危うく生ゆかりんが見られなく所だったぜ

＜＜１

これは俺の希望も入っているが、俺達がゆかりんの気を引いている間に引っ越しの準備とかできないのか？

１７名前：名前が無い程度の能力　投稿日：０３／０７／１７（木）２２：０７：３０　ＩＤ：ａＡｇｅｉ７ｎｓｏ

ゆかりんに会いたい欲望ｗｗ駄ｗｗ々ｗｗ漏ｗｗれｗｗｗ

そしてｗｗＩＤ自重しろｗｗ

……

……

……

……

罪袋達と打ち合わせる事一週間。

予定していた人数よりより多くの人数が訪れた。

薫は紫に探知しやすい様にいつもよりも空間も歪める。

今回は現代人が居る為、罪袋達に気付かれないように罪袋の頭上の空間を歪める事に決めた。

「じゃ、手筈通りに」

おおぉぉぉ！！！！！！！と野太い声が森に響いた。

空間を呪(ほさ)き空間を歪め始め、薫は隠れる。

すると直ぐにスキマが罪袋の頭上に表れ、いつも通り紫がスキマの中から上半身を出した。

それを見た罪袋達は歓喜した。

「あらあら、今回も精が出……る……わ……ね」

「おー」

「ゆかりんだっ！」

「ゆかりんだー！」

「おーゆかりんキタァァァァァァァァァ！」

「ゆかりーん！」

「ひぃっ？！！」

罪袋達の熱烈の歓迎に紫は悪寒に震える。

しかし、罪袋達の勢いは留まる事を知らない。

「おい見ろよ！　スキマがあんぜ？　空間にリボンが付いている！」

「ハァハァ……ゆかりん……うっ」

罪袋達がこんなにも興奮しているのは八雲紫に似ている人ではなく本物の八雲紫に出会った為である。

実際に写真が八雲紫だとしても、彼らにとってそれは八雲紫に似ている人であり、実際に自身の目でスキマを見ない事には信じられなかった。

だが、どうだ？

目の前に居る女性は……？

此方を誘うような妖艶すぎる肢体。

蝶が花に誘われるが如く漂う甘い香り。

胡乱気な雰囲気を纏い特有の能力スキマを使いそのスキマから見下ろされている。

これらの情報を無駄に発達した脳が処理し漢達は服を脱ぎ捨て身につけている衣類は罪と書かれたマスクのみ。

紫は流石に恐怖するしかなかった。

何せ幻想郷の雄と分類されるモノ全て紫に跪くのだ。

所が目の前の男達はマスクを着け全裸で踊っている。何が何だか分からない。

「（薫助けて！）」

ビクッと薫は身体を揺らし作業をそのまま続けようとしたが自分の作業を止め紫を連れ去った。

「あああああっぁぁぁぁぁぁぁぁゆかりーん！！！！！」

「（……自分で呼んでおいてゴメン）」

心の中で謝罪しながら薫は罪袋達を置いてその場から去った。

「ちょっと薫？　何なの？」

じわぁと目を潤まて薫を問い詰める紫。

流石に薫もバツが悪そうに黙る。

正直、紫があんなに脅えると薫は思わなかったのだ。昔から紫と関係を持った時から男関係は慣れていると思っていたのだがあの様子を見るにどうやら免疫がないようだった。

「……ゴメン」

「……まぁ、いいわ」

涙目のまま紫は立ち去り際

「今月も私の勝ちね？　明日じゃいつもの場所で」

薫は頷き、紫が去った後ため息を吐いた。

「今回も駄目だったかぁ……」

言葉は残念そうだったが、満足した声で言う。

携帯を取り出し電話を掛ける。

数秒して電子音が響き、薫のバイト先の料理長――蓮城環が出てくる。

『おう、薫か？　どうした？』

「急に申し訳ないんだけど、僕のシフト明日空けてもらっていいかな？」

『空けとくやるが……おいおい、どうしたんだ？　女とデートか？』

「まぁ、そんな所かな」

『はぁあああああああ?！　おい！　ちょっと待て話し聞かせッ』

騒ぐ環を予想していたので直ぐに電源を切り、再びため息を吐いた。

今度、追及されるんだろうなと苦笑しながら罪袋達を迎えに行った。

後日、薫よりも先に漢達が幻想入りした事を紫から聞かされ薫が大層悔しがり落ち込むのはまた別の話。

「我々は試合に負け勝負に勝ったのだ！！！」

専ら紫の雑用を請け負っているらしい。

第四回目　幻想入り（後書き）

罪袋は下手な妖怪より強いです。

ちなみにスレに出ているのは長です。

第五回目　祝呪の唄（前書き）

作者は音楽から東方に入りました。

第五回目　祝呪の唄

――崩れ落ちる砂の楼閣とけて消えるはつちのくに～♪

――やみがおりるひがしのそら～

紅い館が見える湖の近くで呑気に歌うのは御存知ホサキの神様――斎藤薫《仮》である。無論《仮》というのは彼を呼ぶ為の便宜上に過ぎない。

そんな名前すら持たない神だが、今日も今日とて懲りずに彼は幻想郷に侵入した。

しかし、今日の彼はいつもと一味違う。

いつもならば、現実世界の服を着ているのだが今回は永住できる事を確信しているのか大昔使っていた。神様装束である。

黒い髪、常世の美しさを持つ白い肌。

それらを引きたてる紅と白と黒の三色で彩られた。和服で身を包んでいた。

生命の原初の色――紅

全てに染まる空の色――白

色を虚無に染める闇の色――黒

祝う為の紅色。呪う為の黒色。それらの境界線である白。

生を意味する――紅白

死を意味する――黒白

実に祝呪(ほうじ)きを司る神に相応しい配色である。

その格好したのは良いが如何せん薫は自身の力を放出しない為、神の威厳もへったくれもなく、危機感の薄い少年がいるとしか認識されない。

そんな如何にも弱そうで極上の餌が湖の近くを歩いていたら妖怪はどうするか？

――キッシャー！

当然、野生の白い大蛇が現れてもおかしくないのである。

薫の脳裏に選択肢が浮かぶ。

たたかう

ニア道具

逃げる

ホサく

「うむ、蛇の妖怪。僕と出会った事を感謝するが良いぞ」

服が昔に戻ったせいか口調が神様よりになる薫。

「きびだんご～」

そう言って服から取り出したるは桃太郎お馴染みの串の吉備団子。

何故、串状態なのか突っ込んではいけない。謎の空間操作で何とか

したに違いない。

――シャー？！

目の前の餌の奇行に怪しむ大蛇。漸く自分が狙ったモノの力の大きさが分かる。太古の神と最近産まれ落ちた妖怪。その構図は象と蟻だ。

ただしく、薫は目の前の大蛇を敵と認識しておらずただこの世に生まれ落ちたことを祝福する蛇と認識しかしていない。

「ほれ」

――ぽと

串を抜き団子を目の前の蛇落とす薫。

「ん？　食べないの？　もっといる？」

ほれほれ、と団子を大蛇の口元に持ってくるアホな神様。

しかし、その身に潜む力が強大すぎて大蛇は恐怖で鳴く。身が竦む思いで恐る恐る吉備団子を食べる。件の神様は満足するだけでこちらにはなんにも異常は無い。

「うむ、美味いだろう！　僕の手作りさ！　どうだ！生きるって素晴らしいだろう？　君は妖怪だから人間の恐怖がもっと美味しいんだろうけど……これもこれでいいだろう？」

コクコクと頷く大蛇。

ふと大蛇は気付いた、何故この人物の言葉が分かるのだろう――？

そこまで考えた所で大蛇の身体が温かい何かに包まれた。

「生まれた事を君の母親に感謝するんだぞ？」

祝福を大蛇に授け、宙に浮く。

「そうだ、君は王蛇なりなさい！　そしたら、僕がまたなんかご褒美をあげよう！」

そして薫はそこの場所から立ち去る。

余談だが、その蛇は王蛇となって空を駆ける翼の生えた蛇になるのは別の話。

「う～～ん、実に赤い。ここまで赤いと実は三倍どころじゃなくて五、六倍は速くなるんじゃ……」

ふわふわ飛んでいると薫に妖精が集まってきた。

「わぁ～神様だ～」

「祝福して～」

「祝福～」

神というのはやはりどこか格というのが違うのだろう。次から次へと妖精が薫に集まってくる。

「よーし、こんだけ集まったんだから。みんなで讃美歌歌おう☆」

訳のわからない理屈で急遽、妖精凡そ三百匹＋神一柱で讃美歌を歌う事になった。

～♪～♪

大勢の妖精が一ヶ所に集中して集まるのは幻想郷でも稀である。当然、幻想郷の管理者が出てきて薫を幻想郷の外へと放り出した。

「罪袋たちって幻想卿に入れるんだよね……と言う事は？！」

「罪袋団に入りたいんだけど……え？　駄目？　リア充を認めない？　紫と仲良いから？」

「いや、違うよ。紫はアレだよ。悪友ってやつだよ」

「えっ？　それでも僕を認めない？」

「罪袋になる覚悟はできてるよ？　貴様にマスクを被る資格がない？！」

「いやいやいや、なんでさっ？！」

「おっぱい、おっぱいって言えばいいの？　わかった！！」

「え、何で急に止めるの？　紫に叱られた？　何で？」

祝呪の神様は罪袋に成れなかったらしい。

「ゆかゆかー」

入れなかったが罪袋達と一緒にゆかりんファンタジアを歌いました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8695t/

幻想郷侵入記

2011年12月10日09時48分発行